

社会革命は、身体観の革新を伴ってきた。産業革命以前は、労働にとって身体が資本であり、「身体の時代」が長く続いていた。ところが産業革命によって、力仕事や繰り返し作業は機械が行うようになった。さらに情報革命によって身体を使わないようなサービスやモノが増えた。コロナ禍がそうした流れを加速させ、私たちは「脱身体の時代」の真っ只中にいる。

情報革命を物理社会のサイバー社会へのデジタルトランスフォーメーションと捉えるなら、その変化に自由自在に適応できる身体のDX「自在化身体」を構築することで、単なる脱身体ではなく新たな身体観を確立する必要があると考える。

本講演では、VR、ロボット工学、ウェアラブル技術を基盤とすることで、超感覚・超身体・幽体離脱・分身・合体などを実現可能とする「自在化身体」構築のための取り組みを紹介するとともに、人機一体実現のための暗黙的支援技術、スキル伝達・獲得の自在化などについても紹介する。

将来、自らの身体を自ら望むように変容し自ら望む能力が獲得可能となったとき、自らの能力をはるかに凌駕する人工物が登場した時、自己や自身の能力がどのように定義・認識されるようになるか議論を行う。

身体性の問題点—できること（行為の機会・アフォーダンス）は増やせばいいか？

染谷昌義（北海道大学）

身体性は、私たちが行為によって環境を選び取り作り変えることのできる主体であると同時に、環境によってはたらきかけられる客体でもあるという両義性を示している。それは、実存の自律性にスポットライトを当てる一方で、道具や制度や他者をも含んだ環境のあり方が私たちの行為や経験や思考、そして生き方を制約し条件づけること意味している。だから本当は、身体性を本気で気にする哲学や科学は、身体や環境への技術的介入が私たちの経験と生の行末を大きく左右することに誰よりも敏感なはずなのだ。だが実際はどうだろう。身体性認知科学や4E運動に見るように心の科学や哲学において身体性のステイタスがそれなりに確立された一方で、技術的進展、環境の改変が私たちの生をどう変えるのか、うまく想像できていないのが現状ではないか。

本発表は、コロナ禍以降、特に情報通信技術の進展と環境のスマート化が推し進められる時流のなかで、身体や環境の物理的制約を克服してそれまでできなかったことができるようになることの価値を検討し、できることが望ましいという指向は手放しでは容認できないことを主張する。重要なのは、どんな行為の機会をどのように増やすのが望ましいかということは、身体性から内在的に導かれることではないという点である。身体は（一定の制限はあっても）環境をえこひいきしない。訓練次第でスマート化した環境にも適応し、それが提供するアフォーダンスを利用できるようになる。身体性のこうした「したたかさ」が実は問題なのである。

暴力に対する抵抗と身体の変容

エルザ・ドルランの餌食の現象学を端緒として

長坂真澄

エルザ・ドルランの『自己を防衛する』(Se défendre)(2017)は、様々な身体的暴力とそれに対する抵抗の事例を通して、単純な理論化を阻む暴力の問題の複雑さを示す書である。とはいえ本書は、暴力に対する抵抗を通して身体を変容させていく行程に主体の生成を認める点において、いかにして主体は主体として構成されるのかという哲学の伝統的課題に取り組むための端緒をも提供している。ドルランによれば、自己は、他者の暴力に対する防御に先だって実在しているのではなく、逆に防御の運動こそが自己を生み出す。

暴力に対する抵抗を起点として自己の成立を語るこのような思考は、ドルランが自らそれを「現象学」と名付けるのとは対照的に、現象学の対蹠点に位置している。現象学的還元や超越論的主観性の領野の

発見、他者構成の問題はここにはなく、他者は暴力の発生源として私という主体の成立条件となっている。私が身体において私として実在しているという意識は、他なるものから構成される。私の身体は、世界の中の物体であるような身体である。

本提題では、このような主体の成立について、現象学的な解釈の可能性を持ちながらもそれに抵抗する側面をも持つカント哲学を援用しつつ、考察したい。現象学と排除し合う反現象学は、現象学の可能性を開くものでもある。それは、現象学が現象学の枠組みでは語りえないものを、語りにもたらずからである。